

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 YANG Lirong  
学位 博士(文学)  
学位記番号 新大院博(文)第52号  
学位授与の日付 平成29年9月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
博士論文名 構文分析に基づく中国語の動結式に関する研究

論文審査委員  
主査 教授 朱継征  
副査 教授 大竹芳夫  
副査 准教授 土屋太祐  
副査 准教授 江畑冬生  
副査 准教授 山田陽子

### 博士論文の要旨

中国語でよく用いられる動結式、つまり「動詞+結果補語」の構造に関する研究は少なくな  
い。しかしながら、未解決の問題点も依然として数多く残されている。例えば、動結式自体の  
特性、動結式を用いる構文の特性、さらには動結式の特性が様々な構文にどのような影響を与  
えているのかなどの問題については、まだ十分に議論されていない。本論文は、動結式を用い  
る可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文の各構文を詳細に分析することによって、中国語の動  
結式の構造上及び意味上の特性を解明したものである。本論文は、従来の研究よりも広範なデ  
ータを分析対象にして中国語の動結式を実証的に考察した点に特徴がある。

本論文は次の7章から構成される。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究の検証
- 第3章 動結式を用いる可逆構文
- 第4章 動結式を用いる“把”構文
- 第5章 動結式を用いる動詞コピー構文
- 第6章 可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文から見る動結式の特性
- 第7章 結語

第1章では、本論文の研究目的、動結式の位置づけ、考察対象となる関連構文、研究方法及  
び活用するデータベースについて述べた。

第2章では、動結式、動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文の各構文に関す  
る代表的な先行研究の成果を概観するとともにその問題点を指摘した。

第3章では、動結式を用いる可逆構文の成立要因と意味特性を明らかにした上で、動結式の  
特性を解明した。第一に、動結式を用いる可逆構文の成立は動結式の結果補語が NP<sub>1</sub>、NP<sub>2</sub> と同  
時に意味関係を持つという条件に制約されることを指摘した。第二に、可逆構文に用いられる

動結式の結果補語は“遍(あまねく)”、“満(満ちる)”が最も多いこと、“煩(嫌になる)”、“膩(飽きる)”などのような二項動詞でなければならないこと、動詞や形容詞はいずれも NP<sub>1</sub> と NP<sub>2</sub> の両者と同時に意味関係を取り結ぶ点で共通していることを解き明かした。第三に、動結式を用いる可逆構文においては、動結式の結果補語が“遍”、“満”である場合には受動の意味を、その他の補語である場合には使役の意味を表すことを明らかにした。

第4章では、動結式を用いる“把”構文の成立条件と意味上の特性を明らかにした上で、動結式の特性を解明した。第一に、動結式を用いる“把”構文においては、動結式の前項述語は自動詞でも他動詞でもよい。第二に、動結式の前項述語は処置性のない動詞である必要はない。第三に、動結式を用いる“把”構文の成立は“把”の対象が前項述語の動作によって変化が生じるか否かによって制約を受ける。第四に、“把”は動結式の後にある名詞句、述語部、動結式を含む文全体に焦点を当てる焦点マーカーとして働くという点を実証的に説明した。

第5章では、動結式を用いる動詞コピー構文の成立条件と意味特性を明らかにした上で、動結式の特性を解明した。第一に、動結式を用いる動詞コピー構文の成立は動賓フレーズと動補フレーズの両方の制約を受けることを指摘した。第二に、動賓フレーズを「動詞+名詞」、「動詞+動詞」の2種類に下位分類し、その特徴も明らかにした。具体的には、「動詞+名詞」が用いられる動賓フレーズの場合には、その名詞が表すのは動賓フレーズの動作によって反復できるものであるか否かが、動結式を用いる動詞コピー構文の成立を制約する。「動詞+動詞」を用いる動賓フレーズに関しては、先行研究では全く触れられてこなかった不可離詞「A≒B」型について詳細な分析を行った。その結果、動賓フレーズの前項動詞と結果補語が類義語である場合には、「単一経路制約」を受けて動詞コピー構文が成立することを指摘した。第三に、動結式を用いる動詞コピー構文には動作の反復性や持続性を伴う動詞コピー構文と、謝罪や相手の意見を確認する意味を表す一回性の動詞コピー構文があることを明らかにした。さらに、これら2つの意味を表す動詞コピー構文に対応して、動結式の結果補語が使い分けられていることを主張した。

第6章では、《汉语动词用法词典》に収録されている571個の単音節の動詞を統計処理し、第3～5章で明らかになった動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文の特性と照合しながら、動結式の特性を考察した。具体的には、前項述語に用いられる動詞459個のうち、動作動詞は402個(約87.6%)、非動作動詞は57個(約12.4%)。そのうち動作の変化過程が感知できる終点を含意する動詞は25個(非動作動詞の約43.9%)であり、これらの動詞が動結式の前項述語として使用できることが確認できた。一方、動作の変化過程が認識できない終点を含意する動詞112個は動結式の前項述語に使用できないことも確認できた。また、先行研究では、動結式は使役を含意するとされてきたが、本論文では構文分析に基づいて、典型的な動結式は使役を、非典型的な動結式は叙述義を表すことを指摘した。さらに、使役を表す典型的な動結式は基本的に動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文と共起できるが、非典型的な動結式の下位分類の一つ、自然趨向を表す動結式はこれら3つの構文と共起しにくいという事実も明らかにした。

第7章の結語では、本論文の研究成果をまとめ、今後の課題を示した。

## 審査結果の要旨

中国語における動補構造の下位分類の1つ「動詞+結果補語」、つまり動結式に関してはこれまで多くの研究者によって様々な角度から考察され、一定の成果が得られている。しかしながら、動結式の特徴が十分に明らかになったとは言い難い。

本論文では、動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文の3つの構文を研究対象とし、数多くの検索例文の分析を通して、中国語の動結式の構造と意味について以下のような諸特性を解明した。

1) 動結式を用いる可逆構文のNP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>の語順を自由に変えられるのは、可逆構文の動結式の結果補語である動詞、形容詞がいずれも、NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>の両者と同時に意味関係を持っているからである。また、動結式を用いる可逆構文の成立は動結式の結果補語のNP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>の意味関係に制約される。

2) 動結式を用いる“把”構文においては、前項述語が自動詞になる場合もあれば、他動詞になる場合もあるが、結果補語が“把”の対象の変化結果を表すかどうか動結式を用いる“把”構文の成立要因となる。さらに、本論文では、多くの用例分析を通して、“把”は“把”に後続する名詞句を焦点とする焦点マーカ―ではなく、“把”の後ろにある名詞句、述語部、動結式を含む文全体を焦点とする焦点マーカ―であることを明らかにした。

3) 動結式を用いる動詞コピー構文には、反復性または持続性を表す動詞コピー構文と一回性を表す動詞コピー構文があり、これら2つの意味を表す動詞コピー構文に対応して動結式の結果補語が使い分けられている。例えば、“累”のようなある程度の労力がかかっていることを表せる動詞は反復性または持続性を表す動詞コピー構文に用いられ、動作の累積による結果を表さない動詞または形容詞は一回性を表す動詞コピー構文に用いられることを明らかにした。

4) 先行研究では、終点を含意する動詞は動結式の前項述語に使えないと指摘されてきたが、本論文は数多くの動詞を考察した結果、非動作動詞のうち、動作の変化過程が感知できる終点を含意する動詞は動結式の前項述語に使えることを明らかにした。

5) 動結式の結果補語に用いられる、“亮(明るい)”、“少(少ない)”のような形容詞は時間構造が均質ではなく、内的な起点と終点を含んでいる。これらの形容詞によって形成される動結式は持続性または反復性を表す動詞コピー構文と共起しやすい。また、“早”、“晩”のような時間構造が均質な形容詞によって形成された動結式は一回性を表す動詞コピー構文と共起しやすい。

6) 先行研究では動結式の結果補語が他動詞である場合、生産性が低いものとして十分に考察されてこなかったが、本論文は動結式の結果補語が他動詞である場合には、文中の他の成分と意味関係を持ちやすく、動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文が成立しやすいことを解明した。

7) 使役義を表す典型的な動結式は基本的に動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文と共起できるが、自然趨向を表す非典型的な動結式はこれら3つの構文と共起しにくい。

YANG Lirong 氏の論文の大きな意義は、動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文の3つの構文の成立要因を独創的な方法で明らかにすることによって、中国語の動結式の構造と意味の特性を解き明かした点にある。

YANG Lirong 氏は、本論文の基盤となる研究成果として、学術論文7本(①「中国語の結果構文の使役化成立条件」,『現代社会文化研究科紀要』第58号,109-211頁,2014年3月,新潟大学大学院現代社会文化研究科<『中国関係論説資料』第56号,論説資料保存会編に再録>。②「中国語の結果構文が『使役』の意味を派生するメカニズムについて」,『現代社会文化研究科紀要』第59号,37-49頁,2014年12月,新潟大学大学院現代社会文化研究科。③「動結式“把”構文の成立条件について」,『応用言語学研究論集』第8輯,81-99頁,2015年3月,金沢大学人間社会環境研究科。④「動結式の対称と非対称分布について—“把”構文、動詞コピー構文において—」,『言語研究』第1号,31-44頁,2016年3月,新潟大学大学院現代社会文化研究科。⑤「動結式動詞コピー構文の意味分析」,『東方學術論壇』第3期,45-51頁,2016年9月,韓国学術情報,査読付き。⑥「動詞コピー構文の動賓フレーズに関する分析—「動+動」構造を中心に—」,『現代社会文化研究』第63号,173-183頁,2016年12月,新潟大学大学院現代社会文化研究科。⑦「動結式を用いる可逆構文について」,『言語研究』第2号,12-27頁,2017年3月,新潟大学大学院現代社会文化研究科)を発表している。

また、これらの学術論文に加え、各学会においても口頭やポスターで本論文に関連する研究成果を発表している(日本中国語学会第63回全国大会(「中国語の動補構文が『使役』の意味を派生するメカニズムについて」,2013年10月,東京外国語大学,査読付き口頭発表)、日本中国語学会第64回全国大会(「『動結式』動詞コピー構文の語義分析及び形成メカニズム」,2014年11月,大阪大学,査読付き口頭発表)、日本中国語学会第65回全国大会(「動結式の非対称分布について—“把”構文、動詞コピー構文において—」,2015年10月,東京大学,査読付きポスター発表)、日本中国語学会第66回全国大会(「完了義を表す“V完”と“V好”の使い分け」,2016年11月,立命館アジア太平洋大学,査読付き口頭発表)、新潟東アジア学会(「動結式を用いる可逆構文について」,2016年12月,新潟大学,口頭発表))。これらは、YANG Lirong 氏の研究が高く評価されてきたことの証左と言える。

問題点を1つ指摘するとすれば、論証過程に丁寧さを欠く部分が数か所見られることである。しかしながら、本論文は中国語動結式の分析に新たな展望を開くとともに、これまでに十分に議論されてこなかった点について多くの成果をあげている。特に、本論文は動結式、動結式を用いる可逆構文、“把”構文、動詞コピー構文の特性の全体像、また、異なる性質の動結式と各構文の制約条件を明らかにした点において、中国語文法の研究に大きく寄与している。

なお、本論文の内容は言語学固有の分野に関するものであり、学位としては博士(文学)の授与がふさわしいと本審査委員会は判断した。

以上の審査結果から本審査委員会は、本論文が、博士(文学)の学位を授与するにふさわしい水準に達していると判断した。